

～音とテクノロジーの対話～

～Dialogues between Sound and Technology～

AAC サウンドパフォーマンス道場関連企画
ニンフェアール第3回公演

NymphéArt features

Michiyo YAGI, Eliot GATTEGNO, & Carl STONE

with composers, Miyuki ITO & Kumiko OMURA

八木美知依 (箏)

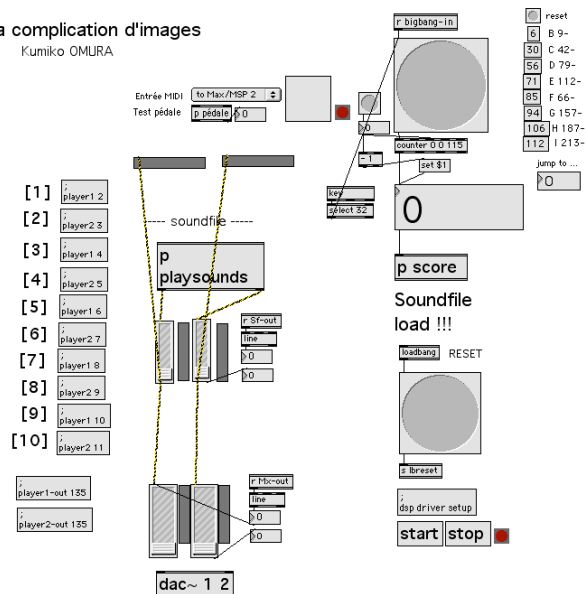
エリオット・ガッテンニョ (サクソフォン)

カール・ストーン (コンピューター/作曲)

伊藤美由紀 (企画/作曲, コンピューター)

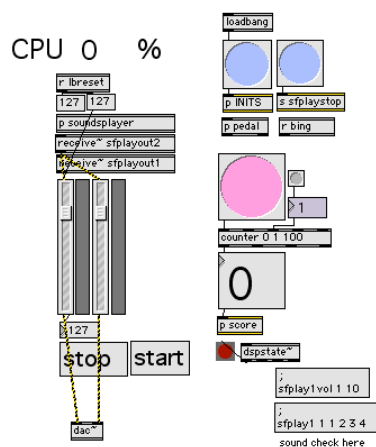
大村久美子 (企画/作曲, コンピューター)

La complication d'images
Kumiko OMURA



Invisible Links 2006/07

for alto saxophone and electronics
by Miyuki ITO



日榮一真 (空間演出/コンピューター/音響アドバイザー)

高橋弘子 (箏/賛助共演)

2007年9月26日(水) 18:30開演/19:00開場

愛知県芸術劇場小ホール

主催: 愛知芸術文化センター企画事業実行委員会/ニンフェアール
Aich Arts Center, Wednesday, September 26, 2007, 7:00pm

サントリー音楽財団推薦コンサート

助成: 芸術文化振興基金 / 財団法人ローム ミュージックファンデーション

～ ごあいさつ ～

GREETING

本日はお忙しい中、「音とテクノロジーの対話」公演にご来場頂き、有り難うございます。

今回の演奏会は、アメリカの大学で教鞭をとった経験もあり、邦楽の古典を超えて様々なジャンルにおいて活躍する愛知県出身の箏奏者、八木美知依と、現代音楽、エレクトロニクスとの共演のスペシャリストでもあるアメリカ人サクソフォン奏者、エリオット・ガッテンニョ、さらに、アメリカ人作曲家／コンピューターミュージック・パフォーマーであり、中京大学教授であるカール・ストーンを迎え、テクノロジーを駆使した作品によるユニークなプログラムをお届けします。また、ネイト・ペーゲル（アメリカ人メディア・アーティスト）と、伊藤美由紀との映像コラボレーション作品、ブライアン・オーライリー（アメリカ人メディア・アーティスト）と大村久美子との映像コラボレーション作品、そして、日栄一真（空間演出）と伊藤美由紀との新作コラボレーション作品を含んだ自主企画ならではの自由で創造的な内容を盛り込んだプログラムで構成されています。「アメリカ」「テクノロジー」をテーマとし、多彩な音空間を五感でお楽しみいただければ幸いに存じます。

2007年9月26日

主催者

1. 高橋悠治 : 「橋をわたって」 (1984) (17 絃箏ソロ)
Yuji TAKAHASHI: *While I am Crossing the Bridges* (1984) for 17-string koto
2. 大村久美子 : 「イマージュの錯綜」 (2002/07) (映像改訂版)
(テナーサクソフォン、コンピューターと映像の為の)
ブライアン・オーライリー (ビデオ)
Kumiko OMURA: *La complication d'images* (2002/07) for tenor saxophone, computer and video
Brian O'REILLY: video
3. カール・ストーン : 「タコミエンド」 (2007) (コンピューターと箏の為の) (世界初演)
Carl STONE: *Tacomiendo* (2007) for computer and koto (WP)
4. 伊藤美由紀 : 「遍在」 (2007)
(17 絃箏とコンピューター、リアルタイム映像の為の) (世界初演)
日栄一真 : 照明エフェクトデバイス制作 / 空間演出
Miyuki ITO: *Ubiquity* (2007) for 17-string koto and computer and real-time visual effect (WP)
Kazumasa HIEI: real-time visual effect

～ 休憩 ～

5. スティーブ・ライヒ : 「リード・フェイズ」 (1967) (ソプラノサクソフォンとテープの為の)
Steve REICH: *Reed Phase* (1967) for soprano saxophone and recorded electronics
6. 八木美知依 : 「ブリッジズ」 (2007) (2面の箏のための) (世界初演)
Michiyo YAGI: *Bridges* (2007) for 2 kotos (WP)
7. 伊藤美由紀 : 「見えない環」 (2007) (映像改訂版)
(アルトサクソフォン、コンピューターと映像の為の)
ネイト・ペーゲル (ビデオ)
Miyuki ITO: *Invisible Links* (2007) for alto saxophone, computer and video (video version)
Nate PAGEL: video

八木美知依(箏)

エリオット・ガッテンニョ(テナー/アルト/ソプラノ・サクソフォン)

カール・ストーン(コンピューター/作曲)

日栄一真(空間演出/コンピューター/音響アドバイザー)

高橋弘子(賛助共演:箏)

ニンフェアール(企画)

伊藤美由紀(作曲/コンピューター)

大村久美子(作曲/コンピューター)



1. 高橋悠治：「橋をわたって」(1984) (17 絃箏ソロ)

沢井一恵の委嘱により作曲された 17 絃箏の為の作品。ベトナム民謡による序奏と即興曲で、インド古典音楽の方法によって、民謡の旋律からとりだした音構造や音形をゆっくり展開する序につづいて、原旋律を提示し、変奏しながら、だんだん速度を上げて楽器のさまざまな技法をみせる主部からなる。(高橋悠治)
もともなった民謡の歌詞はつぎのとおり：

「橋をわたって」
あの一の上に上着をあげた
家に帰って父母に
橋をわたるときに風にとられた、と嘘ついた

あの一の上に指輪をあげた
家に帰って父母に
橋をわたるとき落とした、と嘘ついた

あの人に菅笠をあげた
家に帰って父母に
橋をわたるとき風にとられた、と嘘ついた

2. 大村久美子：「イマージュの錯綜」(2002/07) 映像改訂版

(テナーサクソフォン、コンピューターと映像の為の)、ブライアン・オーライリー (ビデオ)

この作品に於いて、様々なキャラクターを孕(はら)むイマージュが、浮かんで消え、あるいはまた、複数のイマージュが層をなしながら共存するという、渾沌とした響きをなすが、これらの「出来事」は、次第に複数の異質なものによる錯綜状態を超え、ある別の次元へと指向しつつ幕を閉じてゆく。それは、人間の意識で把握しきれぬイマージュが、さらなる超越を経て生み出されたものを把握したい、というある種の不可能性に対する希求である。この作品のサウンドファイルの作成において、委嘱者で初演者のサクソフォン奏者の齋藤貴志氏と、ソプラノ歌手の加藤富美子氏の格別の御協力をいただいた。

(大村久美子)

★ブライアン・オーライリー (メディア・アーティスト)： アメリカ人メディア・アーティスト。シカゴ芸術大学、カリフォルニア大学サンタバーバラ校卒業、作曲家クセナキスのUPIC システムのスタジオで研鑽をつむ。その活動範囲は、音楽、サウンドインスタレーション、映像と多岐にわたっている。2006 年から、ドイツの ZKM (芸術とメディアのためのセンター) にゲストアーティストとして滞在している。

3. カール・ストーン：「タコミエンド」(2007) (コンピューターと箏の為の) (世界初演)

「タコミエンド」は、箏奏者、八木美知依氏のために 2007 年夏に作曲された。箏とコンピューターの 2 人の奏者は、時間軸にそって記述された図形楽譜とテキストによる説明による楽譜を使いながら、即興演奏を行う。箏奏者の音楽的ジェスチャーは、リアルタイム音響処理ソフトウェア Max/msp により処理される。仮想処理プログラムのソフトウェアネットワークは、音の断片を時には、できる限り小さくマイクロ秒にまた時には、30 分ほどの長さに分離する。これらの断片は、多様な処理、再合成を必要とする。楽譜が、演奏家への基礎となるガイドラインを提供している一方で、ソフトウェアをランダムにプロセスさせることの結果によっておこる予測不可能性の要素がある。それゆえに、2 人の演奏家は、注意深く聴きあい、コンピューターが与える情報に応じて、それぞれの演奏を適合させる必要がある。

(カール・ストーン)

4. 伊藤美由紀：「遍在」(2007) (17 絃箏とコンピューターの為の) (世界初演)

日栄一真 (照明リアルタイム エフェクト デバイス制作)、アート工房・夢宙屋 (照明)

「遍在」とは、広範に存在することを意味する。この言葉から、「グローバル性」「類似性」「共時性」「不可避性」「カオス」「運命」「宇宙」「奇跡」などの単語に関連づけた。これらの単語は、私の今までの作品に深く関連している。また、テクノロジーを使うことにより、楽器の生演奏では不可能なことが可能になり、箏の生演奏とエレクトロニクスは、それぞれ影響しあい、同時にあるいは、時間差をおいて、もとの音形を毎回、音響的に変えながら展開される。作品の完成にあたり、八木美知依氏にエレクトロニクス制作のための録音、楽器の可能性についての相談など、ご協力いただいた。また、この作品のために、箏の生演奏の音響データを変換することで、照明の明るさをコントロールするデバイスを日栄一真氏に制作していただいた。

(伊藤美由紀)

★アート工房 夢宙屋(むちゅうや) (照明アーティスト) : 2004年に、代表・作家をつとめる藤本泉が中心となり旗あげ。所属表現者・三林真司・池村聡美・ELJI・祭月と共に活動。宇宙・真理・スピリチュアル・オーラなど、目に見えぬモノをモチーフとした様々な作品は、神秘的かつ斬新な作風で注目を浴びる。屋内外で多数のイベントに出演し、ライブペイントや空間演出を手掛ける。今後も、音楽・古い・衣装・舞台、様々な世界へと旅を続ける。http://muchu-ya.com/

5. スティーブ・ライヒ : 「リード・フェイズ」 (1967)

(ソプラノサクソフォンとテープの為の)

この作品は、サクソフォン奏者、ジョン・ギブソンの協力の上で作曲された。ギブソンがライヒと仕事をしていた1963年から72年の間に循環呼吸の奏法をみにつけ、その奏法を取り入れている。「リード・フェイズ」は、ライヒのフェイズ・シリーズの最初の作品であり、数ヶ月後には、さらに展開された「ピアノ・フェイズ」「ヴァイオリン・フェイズ」が有名になった。前もって録音されたテープパートには、連続して繰り返される5つの音によるメロディーパターンをもち、ライブパフォーマンスでは、テープとユニゾンで始まる同じメロディーを演奏し、徐々にテンポを速め、ゆっくりと録音されたメロディーとフェイズ(位相)をずらされることになる。中間部では、第2の録音されたサクソフォントラックが加わることにより、ますます密になり、その後、ABAの3部形式で、シングルトラックに戻る。この作品は、循環呼吸の奏法を必要とする最初の西洋楽曲でもある。(エリオット・ガッテンニョ)

6. 八木美知依 : 「ブリッジズ」 (2007) (2面の箏のための) (世界初演)

「ブリッジズ」とは陸と陸を結ぶ「橋」であり、箏の音程を定める「柱」(じ)でもある。強い生命力に満ちた箏という楽器は、うねる波や流れをよそに境界線を超えて行く。(八木美知依)

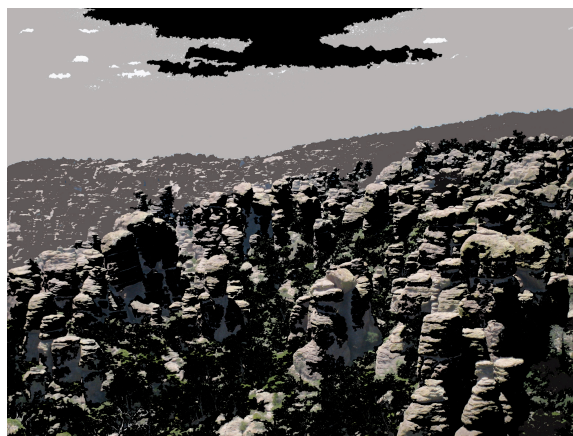
7. 伊藤美由紀 : 「見えない環」 (2007) 映像改訂版

(アルトサクソフォン、コンピューターと映像の為の)、ネイト・ペーゲル (ビデオ)

この作品は、2006年夏、アリゾナを訪れた際に立ち寄った、チリカワ国定公園の自然の偶然の産物、あるいは、芸術ともいふべき雄大な光景がきっかけとなっている。地平線にまで続く砂漠のなかに現れた山並に入り込むと、「砂漠の海に浮かぶ島」と呼ばれる2700万年前の火山爆発の際の浸食によってできあがった奇妙な形の尖塔の群像の景観が突如、目の前に現れ、広大さと自然の偉大さに圧倒され、脳裏に焼き付いた。想像を絶するこの光景が、時代を超えてどのようにして現在のような状態に至ったかを考えることは、まるで地球のロマンを感じるようだ。その場でこの地形を見ている自分も、また、この地形/自然の一部であることを考えると、目に見えないリンクで全てはつながり、そのバランスによって、私たちは存在するに違いない。そんなことを想像しながら、静まり返ったこの世のものでないようなその場所で音を発すると、全ての複雑な群像に反響し、複雑な音が、まるで遠い過去の世界から戻ってきたように自分に帰ってきた。この作品を完成するに至り、初演者のサクソフォン奏者・齋藤貴志氏に、エレクトロニクスの制作のための録音、楽器の可能性についての相談など、ご協力していただいた。また、今回の公演のために、ネイト・ペーゲル氏に、この作品のためのビデオ作品を依頼した。

(伊藤美由紀)

★ネイト・ペーゲル (メディア・アーティスト) : サンフランシスコ在住のアメリカ人メディア・アーティスト。ライス大学 (ヒューストン)、シドニー大学大学院卒業。アップルコンピューター会社で働いている間に、実験的なマルチメディア作品制作を始める。ビデオ、サウンド、グラフィック、ウェブ、バーチャルリアリティ、インターラクティブテクノロジーを使い、振付師、作曲家、ビデオアーティスト、デザイナーなど様々な分野のアーティスト達とコラボレーションを行っている。



チリカワ国定公園 (写真: 伊藤美由紀)



Photo: Yuriko Takagi

八木美知依（箏）
Michiyo YAGI (koto)

邦楽のみならず、前衛ジャズや現代音楽からプログレッシブ・ロックそしてポップスまで幅広く活動するハイパー箏奏者。NHK 邦楽技能者育成会卒業後、ウェスリアン大学客員教授として渡米中、ジョン・ケージ、ジョン・ゾーン等、独創的な活動をする音楽家に影響を受ける。1999年、ゾーンのプロデュースによるソロ・アルバム「Shizuku」(Tzadik)をリリース。2001年には自己のアンサンブル Paulownia Crush とのCD「ゆるる」(イーストワークス)をリリースし、2004年にこのグループを率いて国際交流基金主催のロシア・ツアーを行う。2005年、世界初の全編オリジナル曲による17絃ソロ作「Seventeen」(ジパング)をリリース。最新作は「八木美知依、インゲブリグト・ホーケル・フラーテン、ポール・ニルセン・ラヴ／ライブ！アット・スーパーデラックス」(Idiolect／ボンバ、06年)。NHK《邦楽百選》、NHK-BS《Weekend Japanology》、TV朝日《題名のない音楽会》やメールス・ジャズ・フェスティヴァル、ヴィジョン・フェスティヴァル、コングスベルグ・ジャズ・フェスティヴァル等に出演。マーク・ドレッサー、ペーター・プロッツマン、エリオット・シャープ、フレッド・フリリス、大友良英、クリス・カトラー、ハン・ベニク、ビル・ラズウェル、Sachiko M、勝井祐二 (ROVO)、カン・テファン、巻上公一、ビリー・バング、MZN3ら世界のトップ・インプロヴァイザーと共演するかたわら、アコーディオン奏者のcoba、浜崎あゆみやTakuya (元Judy & Mary) といったJ-POPアーティストのレコーディングやステージにも参加。その驚くべきテクニックと無類のリズム感で聴く者を圧倒している。

エリオット・ガッテンニョ (サクソフォン)

Eliot GATTEGNO (saxophone)

ニューイングランド音楽院 (ボストン) で、ケネス・ラドノフスキ氏にサクソフォンを、ジョン・マリア氏に作曲を師事、学位、修士課程卒業。Second Instrumental Unit (ニューヨーク)、World-Wide Concurrent Premieres のディレクター、ニューイングランド音楽院、イースタン・ナザレン大学で講師を務め、また、バンフ・センター (カナダ)、ハーバード大学、コロンビア大学、プリンストン大学、スタンフォード大学、UCバークレー／サンディエゴ大学などのアメリカの主要な大学でのレジデンスアーティストとして、マスタークラスを行う。ボストン・モダンオーケストラプロジェクトでのコンチェルト、カーネギーホール (ニューヨーク)、マーキンホール (ニューヨーク)、リンカーンセンター (ニューヨーク) でのリサイタル、タングルウッド (ボストン)、ダルムシュタット (ドイツ)、イエローパーンなど主要な現代音楽フェスティヴァルで演奏。ミルトン・パビット、マイケル・フィニシイ、トリストラン・ムライユなど世界的に著名な作曲家らの作品を含む160曲を超える作品を初演、アルパニー、カンタロープ、イノヴァなどのレーベルによる録音がある。アフリカ、アジア、ヨーロッパ、南北アメリカで国際的に演奏活動を行う。



カール・ストーン (コンピューター/作曲)

Carl STONE (computer/composer)

1953年ロサンゼルス生まれ。1969年から1975年にかけてカリフォルニア芸術大学にてモートン・スポトニックとジェームズ・テニーに学び、1972年から専ら電子音楽／コンピューター音楽の作曲に取り組む。1980年頃より、それまでの電子機器に完全制御された作品から、1回生／ライブ性の強い作品へと作風を変化させ、1985年以降はマッキントッシュと他のデジタル機器との組み合わせによる様々な音響／音楽語法の可能性を追求。デジタル・サンプリング／プロセッシングを大胆に導入し、独自のサウンド・テクスチャとグルーブ感を持つ音楽を創り出している。2001年より中京大学教授。



高橋弘子（箏） / Hiroko TAKAHASHI(koto)：NHK 邦楽技能者育成会卒業。沢井箏曲院講師試験にて奨励賞受賞。愛知県文化振興助成事業としてのコンサートや愛知県芸術文化センター主催による「若手邦楽家の挑戦」に出演してその頭角を現し、名古屋市しらかわホール主催による室内楽フェスティバルでは2年連続特別賞受賞。愛知芸術劇場にて原将人監督作品のライブ・ムービー『MI・TA・RI!』の音楽演奏に参加。六本木 SuperDeluxeにて箏のオールナイト・イベント「じゃぼねすくの夜」に出演。CD『八木美知依 & Paulownia Crush／ゆるる』(ewe)の録音に参加。2004年、外務省・国際交流基金の派遣事業として「八木美知依 & Paulownia Crush ロシア・ツアー」に参加。自己のリサイタルに加え、Paulownia Crushのリーダーとして活動すると共に、二胡、シンセサイザー、シタールとのアンサンブル Super Asian Stringsのメンバーとして演奏と編曲を手掛けている。幅広いレパートリーを安定したリズム感と豊かな表現力で聴かせる高橋弘子は、これからの邦楽界を担う逸材として注目されている。

日栄一真 (空間演出/コンピューター) / Kazumasa HIEI (computer):2002年より音楽製作プロジェクト「マクロファー ジ・ラボ」として活動、NEW YORK King Street から SILVA と macrophage lab.のユニット"Japone Brethren"でオリジナル 曲"Wave"をアナログリリース他、能管とを用いた作品でフランス、イエールのファッションショーの音楽を担当するなど、制作において幅広く活動する一方、LAPTOP,MIXER,EFFECTOR を使ったライブでは、オリジナル曲をその場で構築していく手法で、ニューヨーク、ヨーロッパ圏のアーティストと共に PLAY、その他、光を MIDI に 変換するデバイスの制作、重力方程式を用いた作品など、新しい音楽の 表現手法に関しても勢力的に制作、ヤマハ株式会社契約中には、電子パーカッションにおいて特許を取得。現在名古屋芸術大学音楽学部非常勤講師。 <http://www.macrophagelab.com>

ニンフェアール・メンバー：



伊藤美由紀(作曲家)
Miyuki ITO (composer)

愛知県立芸術大学、マンハッタン音楽院修士課程(ニューヨーク)、コロンビア大学博士課程(ニューヨーク)修了。芸術音楽博士。寺井尚行、ピエール・シャルベ、トリスタン・ミュライユ、フィリップ・ルロー各氏に師事。文化庁芸術家在外研修員として、IRCAM(フランス国立音響研究所)にて研鑽を積む。神奈川県合唱曲作曲コンクール、アボット室内楽作曲コンクール(ボストン)、Boris & Edna Rapoport 賞(NY)、名古屋文化振興賞、日本交響楽振興財団作曲賞入選など、受賞。ハーモニアオペラカンパニー(NY)、東京オペラシティ、ミュージック・フロム・ジャパン(NY)などによる作品委嘱ほか、カーネギーホール(NY)、レゾナンスフェスティバル(パリ)、ISCM 世界音楽の日々(香港)、国際コンピューター音楽会議(マイアミ)、SMC07(サウンド&ミュージック・コンピューティング国際会議/ギリシャ)をはじめ、世界各国の現代音楽祭で作品が演奏される。ゲラルド・オーンタフェローシップとともに、2005年春、カリフォルニア・ジェラシ・アーティストレジデンスにて創作活動。「Fading Memories…」が、関澤真由美マリンバソロアルバム CD「My Favorite Things」(AUCD-13)に収録。現在、愛知県立芸術大学、名古屋芸術大学、千葉商科大学にて教鞭をとる。2007年2月、日米作曲家グループ、JUMP(ジャンプ)をたちあげる。2008年2月、アタックシアターによるダンス委嘱作品がピッツバーグ初演予定。



大村久美子(作曲家)
Kumiko OMURA (composer)

東京芸術大学作曲科を卒業後、ドイツ・エッセンの Folkwang 芸術大学にて、作曲をニコラウス・A・フーバー氏に、電子音楽をルドゥガー・ブルンマーの各氏に師事。その後パリの IRCAM(フランス国立音響研究所)にて電子音楽の研鑽を積む。帰国後、東京芸術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻にて古川聖氏のもとで、マルチメディアアートの研究をする。卒業後、文化庁芸術家在外研修員として渡独し、引き続き現在もカールスルーエの ZKM(芸術とメディアの為のセンター)の客員芸術家として創作活動を行っている。作品は、第15回入野賞オーケストラ部門(1994)、オランダのガウデアムス作曲賞グランプリ(1998)、ドイツのハノーファー・ビエンナーレ(1999)、武生作曲賞(2004)、日本現代音楽新人賞(2005)などを受賞。ヴィッテン音楽祭、musica viva(ドイツ)、Agora Festival, Centre Acanthes(フランス)、国際コンピューター音楽会議(1999 ベルリン)、アジア音楽祭などの欧米や韓国、日本の各地で演奏され、齋藤貴志サクソフォン作品集 CD(ALM Record)、コンピューターミュージックジャーナル DVD(MIT、アメリカ)、ヴィッテン音楽祭 CD(西ドイツ放送局)に収録されている。


ニンフェアール：2004年設立。ニンフェとは、フランス語で睡蓮(すいれん)の意味で、ギリシア神話の乙女ニンフともかけてあり、またこのニンフという単語はさなぎという意味もあります。アールはフランス語で、アートを意味し、私達はこの団体名のもとに、美しく新鮮で、これからの可能性を秘めた芸術作品を皆様にご紹介したいと願っております。2008年公演企画。 nymheart@yahoo.co.jp

♪ 高橋悠治(作曲家 1938～)：ピアニストとしてデビューした後、ベルリンに留学し、ヤニス・クセナキスに師事する。さらにロックフェラーIII世財団の奨学金を得てニューヨークに渡り、コンピュータによる作曲を研究する一方、世界各地で演奏活動を行う。1972年に帰国後、作曲家の故・武満徹らと「トランソニック」を組織した他、アジア民衆の抵抗歌をうたう「水牛楽団」を組織、執筆や対談も精力的に行っている。

♪ スティーブ・ライヒ(作曲家 1936～)：ミニマルミュージックを代表するアメリカ人作曲家。コーネル大学、ジュリーアード音楽院で学ぶ。アフリカ音楽、ガムラン音楽の影響を強く受け、徐々にフェーズしていくパターンを作る為にサンプリングしたテープ・ループを用いたりする手法を用いた初期の作品をはじめ、現代音楽の作曲家のみならず、テクノミュージックやエレクトロニカのアーティストたちにも多大な影響を与えている。

♪ Max/msp(ソフトウェア)：音楽のためのグラフィック・プログラム開発環境。IRCAM(パリ)においてミラー・バケットを中心に1986年から開発が始まり、のち、Cycling74(サンフランシスコ)とともに、販売される。Maxは、MIDIを、MSPは、オーディオのデジタルプロセッシングを行う。リアルタイムでのインターラクティブ・ソフトウェアとして、現代音楽の世界において、限りない可能性を与えている。今回のプログラムのなかで、カール・ストーン、伊藤美由紀、大村久美子の作品は、Max/mspを使用している。

主催：愛知芸術文化センター企画実行委員会／*NymphéArt* (ニンフェアール)

助成：芸術文化振興基金  / ローム ミュージックファンデーション

協力：名古屋アメリカン・センター

後援：名古屋芸術大学音楽学部

<協力スタッフ>

音響：吉川敦、水谷高治、齋藤雄太、戸田裕久

舞台：鈴木昭宏、山口泰幸